

舞鶴地区の美術工芸調査(続)

美術工芸研究室

先年、舞鶴市教育委員会より調査依頼をうけ、舞鶴地区の文化財調査をしたが、その時は寺院の所藏品ばかりを調査の対象とした。そこで、個人の方から寺院に関係あるもので、この地区に深い関係をもつものがあるので調査してほしいとの依頼がしばしばあつたが、機会をつくり調査に行き、調査したものの中に七宝製の香炉がある。

繩手香炉 一基 舞鶴市 井上金次郎氏蔵

七宝

高さ 七・二匁 口径 八・〇匁 胴張 八・六匁

この香炉は早くから「繩手香炉」と呼ばれ、著名であつたが、所在が判明しないため、ますます識者間においては探求されていたと聞く。今回、所蔵者の井上氏の御厚意により調査することが出来た。

この七宝製香炉は、持つところが銅で繩状につくられているため「繩手」の名称が生じたと考えられるが、銅製で全面に七宝で小草花文様を表わしている。七宝というのは、わかりやすくいえば金属被面を珫瑯質の釉薬で裝飾加工したもので、七宝という名称はわが国で称したといわれているが、作品名が文献にみられるのは室町時代からであらう。

七宝には技術の上からみると、金属の細線で文様をあらはし釉薬を

充填した七宝独得の有線七宝、金属線を全然焼込まない無線七宝、素地に彫刻し透明な釉薬で覆つて文様が透視できる透明七宝、その他透胎七宝、省胎七宝などがある。そして胎には銅、真鍮、鉄、陶磁、金、銀が用いられた。

七宝の製法は西方にはじめられて中国に入り、そしてわが国に渡来されたものといわれている。わが国では古く古墳から棺の金具に七宝を施したものが発見されたといわれているが、七宝として立派な作品はなんといつても正倉院の「黄金瑠璃錫脊十二稜鏡」であろう。七宝の製品については典鈔司でその製作が行われたとの説もあるが明らかでない。わが国で七宝の記録がみられるのは、足利八代將軍義政の同朋衆であつた相阿弥が編した「君台観左右帳記」に「七宝・瑠璃」とあり、同じく相阿弥の「御飾記」に七宝瑠璃の火鉢、火箸の記事がみられるが、これが最初のものではあるまいか。これらはおそらく当時の唐物愛好の思想からして、明貿易によつて中国から輸入されたものであつたらう。

七宝の作品が確実にわが国で製作されるようになり、その遺品もみられるのは江戸時代になつてからである。よく知られているものは、桂離宮月波楼にある襖の棧の杼形引手、同じく松琴亭襖の蝶螺形引手

に施されている七宝は製作も早いものとされている。

この繩手七宝香炉は日本製かどうか。有線七宝と称すべき作品であるが、日本製ではなく、桃山時代におそらく南蛮貿易によつて輸入されたものであろう。香炉の蓋はないが、銅製の繩状の握りが力強くつくられて、全体の色調に一つのアクセントを与えている。胴全面は淡い青色で、その中に小さい花を唐草風に表わしているが、花の弁には白、朱、紺の三色、花蕊は紺であらわす。草花の葉は白、淡青、紺色の三色を用いているが、この配色はまことに美しい。七宝の技術は必ずしも秀れたものとはいえないが、淡青地に可憐な草花を白、朱、紺、淡い青色で情調的に表現している作風は、観る人をこよなく引きつけてゆく。充填された釉薬は不透明であるが、それだけに淡青地にしつくりとけあつて一種の静寂感を表出している。花卉や葉に用い

られている紺色は、いわゆるペルシヤンブルー的な色調であり文様構成などからみて南方の製品と思われるが、魅力ある作品といえよう。

繩手香炉

この香炉は田辺(舞鶴市)城主細川幽斎の愛用品であつた。幽斎は和漢の学に通じ、こと

に歌道にすぐれ古今伝授、源氏物語の奥義をうけた文武兼備の人であることはあまりにも著名である。彼はこの香炉を彼が帰依していた青葉山松尾寺に寄進したが、何時の頃から散逸してしまつた。この香炉が幽斎の所有になるについて、このようにいささつが伝えられている。この香炉はもともと石田三成が愛蔵していたものといわれている。現在もその香炉を納める箱は薩摩杉箱で、蓋と身の合せに「石田」の焼印が押されているが、三成所有のいい伝えを語る一つの資料でもあろう。

石田三成は秀吉没後、徳川家康の行動に反感をもち、大谷吉継、安国寺惠瓊等と謀議の結果、家康打倒の挙兵の計画をたて、家康の罪状十三カ条を教えあげ家康に送るとともに、諸大名にも送つてその参加を求めた。慶長五年七月のことである。天下分け目の関ヶ原戦の前提となるものであるが、三成の誘いに応じた諸大名は毛利輝元をはじめ、その多くは関西の諸侯であつた。細川幽斎は西軍の勢力圏内にあつたが三成の誘いに応ぜず、彼の田辺城は東軍の拠点となつていたのである。慶長五年七月二十日から丹波、但馬の諸侯によつて田辺城は攻撃をうけ、五十日間包圍攻撃されたが陥落しなかつた。三成としては細川幽斎をどうしても西軍に引き入れたかつたのである。その一つの手段としてこの珍しい七宝香炉を幽斎に贈つたと伝えられているが、もちろん、田辺城攻撃前のことであつたらう。当時としてはこの七宝製の作品は伯載品で珍貴なものであり、幽斎も大切に取扱つていたと思われる。

三成がこのような香炉を入手し得る可能性は十分にあつた。三成は

天正十四年から十六年の末まで堺の奉行をつとめている。当時の堺は南蛮貿易港として繁栄を誇り、珍しい外国品も多く輸入され諸侯達の求めに応じていた。騒然たる世情をよそに文化が栄え、茶の湯も今井宗久や津田宗及たちの茶人によつて盛行していた時である。三成だけでなく、三成の父正継は三成の代官として堺奉行の政務をみ、また、兄正澄も文禄二年より慶長四年まで堺の奉行をつとめていることからして、三成がこのような香炉を入手することはいとたやすいことであつたろう。才智にすぐれていた三成がどんな意図があつたにしろ、当時においては珍しい七宝製の香炉を幽齋に贈つたことは幽齋の趣好を知つていたからと思われる。関ヶ原の戦いに敗れた三成は、その六日目に捕えられ慶長五年十月一日に処刑された。幽齋は三成の冥福を祈る意味もあつてか、この香炉を松尾寺に寄進したのであろう。

この香炉にまつわる伝説はともかく、この作品はわが国の七宝工芸史上貴重な資料といわねばなるまい。

(守田 公夫)

- (7頁より)
- 6 関伽井屋には修二会期間中三十七本の櫛をとりつけるが、これは蘇悉地羯羅經・棟沢処品に説く樹木による三十七勝処を象徴したものであろう。
 - 7 森蘊著「中世庭園文化史」―大乘院庭園の研究―奈良国立文化財研究所学報第六冊昭和34年2月吉川弘文館刊。
 - 8 小林剛博士編「西大寺叡尊伝記集成」奈良国立文化財研究所史料第二冊昭和31年3月大谷出版社刊。
 - 9 經典によると比丘又は比丘尼が住して罪なき地を淨地、その地を清淨とするのを結界という。淨住とは結界した淨地に住する姿である。
 - 10 蘇悉地經によると勝処の結界を行うことによつて速得成就するということから、結界による淨地としてこの寺名を冠したと思われる。
 - 11 森蘊著「称名寺の建築と庭園」建築史第6巻第4号昭和16年7月建築史研究会刊。
 - 12 北条貞顕は六波羅探題を経て執権となり金沢称名寺の最盛期を現出した。長期京都に滞在し公家と交際し、文学に志した。正慶2年(1333)3月の円覚經二巻や乾元2年(1305)校合の日記「たまきはる」一帖なども彼の筆による。
 - 13 勝尾寺文書は昭和6年大阪府、「史迹と美術」は第34輯の7(第34号)昭和38年8月史跡美術同巧会。